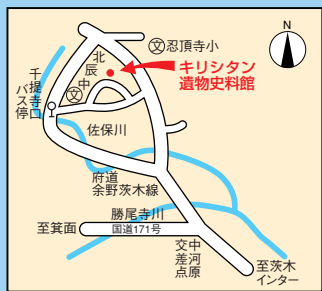


第13回

茨木市

キリシタン遺物史料館～隠れキリシタンの歴史をたどる～



茨木市街から北へ10km。初夏のひざしの中、両側からせまった山々の緑が鮮やかで、そのすそに並び棚田の水の帯が映える。千提寺地区の山深く細い道を登って行くと、茨木市立キリシタン遺物史料館の看板が見える。さらに坂を登ると、ステンドグラスをあしらった白い建物が現れた。

史料館には、この地でキリシタン遺物発見の始まりとなった「墓碑」の写しや、「聖フランシスコ・ザビエル画像(写真)」、「マリア十五玄義図」などの絵画、「キリスト磔刑(たっけい)木像」などの彫刻、「木製十字架」や「メダル」などが展示されている。学校の歴史の教科書にも登場する「聖フランシスコ・ザビエル画像」は、今は神戸市立博物館に所蔵されているが、もとはこの地の、家の屋根裏のハリにくくりつけられていた「あけずの櫃(ひつ)」内から発見されたという。

この地でキリシタン遺物がみられるのは、1573(天正1)年に高槻城主となった高山右近と関係がある。摂津国三島郡高山庄(現:豊能町高山)に生まれた右近は、12歳でキリスト教の洗礼を受け、後にキリシタン大名といわれた。その影響で、三島地方はキリスト教信者の一大中心地になったという。

しかし、キリスト教の力が政治に及びぶのを恐れたのか、1587(天正15)年豊田秀吉はキリスト教の布教と信仰を禁止、後の徳川幕府も「禁教令」を発布し、右近に信仰を捨てるように命じた。だがそれを拒否した右近は、領地も財産も奪われ、最後にはマニラに追放されて生涯を閉じた。

1873(明治6)年に明治政府がキリスト教の禁止を解くまで、この禁教令は続く。

右近が追放されてから、キリスト教はこの地では消滅したかと思われていたが、1919(大正8)年に千提寺の山中で十字のついた「墓碑」が発見され、それ以後、キリスト教に関する遺物が次々と発見された。それらは村の家々でひそかに伝えられてきたといわれ、キリスト教の祈禱文(オラショ)も口伝で残されていた。

信者は、禁教令の中で仏教を信仰しているように見せながら、山間部で隠れるようにキリスト教を信仰していたといわれる。信教の自由を奪われた時代。迫害や追放を受けながらも、自らの信仰はなにものにも侵されないとする人としての力強さや、精神が常にあったのだろう。静かな山間の田園風景の暮らしの中に、自由を求める人間の底力を感じる。

この史料館からは、キリシタン自然歩道が整備され、千提寺の「キリシタン墓碑」(高雲寺)もある。また、西へ山をひとつ越えた、右近生誕の豊能町高山には、高山で最後まで信仰を守って残った2組のキリシタン夫婦の墓と伝えられる「高山マリアの墓」や禁教令が伝えられた「高礼場跡」(現在の告知板のようなもの)もある。

(キリシタン遺物史料館は、阪急茨木市駅や千里中央駅から、阪急バス「千提寺口」下車東へ900m。)



編集後記

- 「そうぞう」に携わって、1年が過ぎた。この間、色々な人にインタビューに行け、様々な話が聞けたことは良かった。今年は、有名芸能人にインタビューに行きたいな……(T)
- 人間は多様性を持つということ。社会構造の中で、他者に対して権利侵害をする可能性を持つということ。すべての人との関係において、常に権力関係に敏感である大切さを思った。(M)

言葉は変わる

守口市 小学五年生(当時) 森本 颯樹

いたいんだよ。
かなしいんだよ。

言葉は時に、ナイフにかわる。

「サツキホール!」そんなあだ名、

やだよ……

心の中では思っても、言い返すのが、

こわかった。

言葉のナイフ、ぬけないんだよ。

発したあなたは笑っても、

ささった私はいたいのよ。

心の血は、時としてなみだにかわる。

ナイフをちゃんとボールに変えて、

受けとってもらえる言葉になったらな……

さっと やさしい言葉のボールに

なるのにな……

2005年度人権啓発詩 読書感想文募集事業
 (大阪府 大阪府教育委員会 愛ネット大阪・(財)大阪府人権協会)の入選作品より

2006(平成18)年6月発行

この情報誌は20,000部作成し、1部あたりの単価は48円です。

発行/大阪府政策企画部人権室

編集/財団法人大阪府人権協会

〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目
 TEL.06-6941-0351 FAX.06-6944-6616
 http://www.pref.osaka.jp/jinken/

〒556-0028 大阪市浪速区久保吉1-6-12
 TEL.06-6568-2983 FAX.06-6568-2985
 http://www.jinken-osaka.jp



R100
 古紙配合率100%再生紙を使用しています

「そうぞう」とは

人権尊重社会を実現するためには、様々な偏見や差別を受けている人の状況・気持ちを「想像」すること、豊かな人権文化を「創造」することが必要です。この情報誌がこれらの「そうぞう」につながるように一そんな思いが込められています。